



仲間と共にこれからの生き方を考える学び

特別活動 (学級活動)

I はじめに

望ましい集団活動を通して、人間としての生き方を考え、自己を生かす能力を育むことは、学校で学ぶことの最も大切な視点である。特別活動においては、学校生活を基盤としながらよりよい人間関係を築き、学校生活の充実を図ることが、学級活動や生徒会活動、学校行事のそれぞれの内容に合わせて求められている。そして、よりよい人間関係の構築は、現代の学校教育の中で重要な課題の一つでもあり、特に、いじめや不登校の解消、命の大切さや充実した生き方を指すために、心の教育を充実することを目的とした道徳科の新設と関連させて、一層の充実を図ることが必要である。

また、改訂を迎える学習指導要領の特別活動においては、様々な集団活動に自主的、実践的に取り組み、互いのよさや可能性を發揮しながら集団や自己の生活上の課題を解決することがねらいとして示されている。これは、本校が今次研究で進める「自律」と「共栄」に向かう視点そのものであり、特別活動のねらいに迫る学びには、「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てが重要な役割を果たす。加えて、新設された学級活動の内容の取扱いには、学校や家庭及び地域における学習や生活の見通しを立て、学んだことを振り返りながら、新たな学習や生活への意欲につなげたり、将来の生き方を考えたりする活動を行うことが示されている。これは、本校が進める2年次の研究の重点である「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びと強く関連するものである。

そこで、改訂を迎える学習指導要領における特別活動（学級活動）のねらいの達成を目指し、本校が進める特別活動（学級活動）における「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの実践により、自他の理想の姿を描き、その実現に向けて自ら他者や対象に働きかけ、互いのよさを活かしながら、新たな知を創り築き上げ、自己を更新していくことができる「自己を拓き、協創する生徒」の育成を目指していきたい。

II 研究内容

1 学級活動における「自律」と「共栄」に向かう学び

学級活動における「自律」と「共栄」に向かう学びは、「関わる者同士を活かし合う理想」を前提に、解決の方向性に見通しをもち、解決の方法を検討したり、選択したりすることを通して、集団や自己の生活上の課題を解決するという知の獲得を目指す学びである。

現行、及び、改訂を迎える学習指導要領に示される学級活動の目標の達成を目指したとき、必要とされる学びは、生徒一人一人が、学校生活や社会の諸問題の解決に向けた課題を見出し、多様な視点や情報を基に仲間と話し合い、様々な解決の方法の中から最適解を見出すことや、これからの生き方を描くための意思決定が必要であることから、学級活動における「自律」と「共栄」に向かう学びで目指す姿と一致するものである。

しかし、中学生の発達段階や実態を考えたとき、すぐに適切な方法を見出したり、検証可能な取り組みを導いたり、適切な自己の在り方を探し当てたりすることは難しいことである。特に、中学生の時期は、社会との接点や経験が少ないことから、多様な解決の方法を見出したり、予想したりすることが難しい。そこで、身近な生活と関連付けて考察していくことで、自分を含めた関わる者同士や社会（集団）の状況を適切に捉え、実行可能な方法を見出すことが可能となる。これが、学級活動における「自律」と「共栄」に向かう学びを質的に向上させるための「省察」のアプローチである。この身近な生活と関連付けた考察のアプローチをもとに、「自律」と「共栄」に向かう学びを進め、求める生徒の育成を目指していきたい。

2 「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立て

(1) 事後の学びに見通しをもち、修正を保証した取り組み（実践例①）

学級や学校の生活づくりの内容における「自律」と「共栄」に向かう学びは、学級の諸問題の解決に向け、解決の方法を学級全員の話し合いを通して合意形成を目指す学びである。この合意形成によって導かれた具体的な行動や取り組みが、学級や学校の生活づくりの内容において獲得を目指す知であり、この知の獲得により、今後の学級や学校生活の展望や期待につながるものである。

しかし、合意形成した解決方法が適切に行われているか、実行可能な内容であったか、学級の諸問題を解決する手段として適切であったかなどを検証し、再び修正することが可能なかどうか、生徒にとって明確ではないことがほとんどであるため、「省察」を活用することが必要となってくる。

毎日の朝の会や帰りの会において、具体的に取り組んだ内容については、常に検証や修正を繰り返すことができるが、学級の諸問題の内容によっては、必ずしも検証と修正が可能ではない。そこで、学級会で集団決定したことが、定期的に検証できる学級会を設定することや、検証のポイントを明確にする事後の学びを展開することとした。

この一連の学びにより、事後の学びに見通しをもつだけでなく、検証のポイントを明らかにすることで、集団決定の内容と比較することができ、以降の学級会において、「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びにつなげることができる。これまで単発で行われてきた学級会の在り方を見直し、検証を重ねる期間を設定し、再び具体的に取り組むことを集団決定できる学級会の設定という一連の学びが、「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びとなり、学級活動の目標に迫るものである。

(2) 分散した解決の過程を可視化し、共通の視点を導く授業展開（実践例②）

学級や社会の諸問題は、複数の原因が相互に関連しているだけではなく、一つ一つの原因も複雑な過程や背景が存在していることから、生徒が解決の方法や取り組むべき具体的な行動を見出すことが難しい。よって、一つ一つの原因の複雑な過程や背景という情報を仲間と共有し、解決の方法に必要な共通の視点を導き出すことが必要である。そこで、学級や社会の諸問題を構成する様々な情報を可視化することで、一つ一つの原因の複雑な過程や背景を明確化し、共通の視点を導く授業の展開を、「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てとした。

複数の分散した情報（原因の複雑な過程や背景）の可視化には、まずは可視化する対象である一つ一つの情報の収集が必要である。そして、複数の分散した情報の収集には、仲間との分担が重要である。仲間との分担による情報の収集は、自分が得た情報と、仲間との協力により、解決に向けて多くの原因の情報を集めることができるメリットに加え、協働的に学ぶ場を通して、互いの信頼や責任といった態度面の育成にも寄与する学びである。また、多くの原因の情報を集めるために、どのようなカテゴリー（構成要素）に着目すべきかを考え、仲間と計画することは「自律」に向かう視点となり、社会（集団）を構成する者の互いを活かし合う態度面の育成は、まさしく「共栄」に向かう視点となる。

情報の可視化は、足りない情報やわからないことを明確にしたり、他者との関わり方や社会（集団）の在り方を適切に捉えたりすることができ、発展した課題や複雑な問題への対処としての共通の視点（解決方法）へつなげることができる。

この可視化（他者と共有）した情報を比較や関連付けを行う活動が、共通の視点を導くための「省察」のアプローチである。分散した情報を可視化することにより、カテゴリーのそれぞれの根拠等の情報から導くことができる共通の視点を導いていくことを、「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てと考えた。

(3) 身近な生活の考察を踏まえた理想と現実（社会問題）との差の改善方法の検討（研究大会）

学校や社会の諸問題を解決した理想を描くことは大切なことであり、理想を描くことで解決の見通しと、解決のための行動を起こす意欲を高めることができる。また、多くの社会事象は、理想と現実の差を整理することで、現在の課題を明確化することができる。

そこで、学級活動においては、対象となる事象についての理想を共有した後に、実際に起きている問題との差から課題を明確にし、その差を改善したり、縮めたりする方法を話し合い、関わる者同士の権利や充実感を大切にしながら、自己決定や集団決定という知を獲得する学びを「自律」と「共栄」に向かう学びとした。ここで着目しなければならないことは、生徒が描く理想は、学級や学校の生活づくり、適応と成長及び健康安全、学業と進路のどの内容においても、自己中心的で他者意識のない理想となってしまうことがあるという点である。また、学校や社会で起きている問題の原因は、自分や自分たち以外にあり、それをどう取り除くかということに終始してしまうということである。自分も学校や社会を形成する一員であることを考えたとき、自己の在り方を見つめ直すことが重要であり、解決の方法の選択には自分にも目を向ける必要がある。さらに、現在だけではなく将来にわたって、多くの人や立場が異なる人にとっても理想と言えるのかということを確認していくことが、「共栄」を意識した解決のために必要な方法を考える「自律」に向かう視点となる。

また、学校や社会の諸問題の解決の方法や、自己の在り方を考えたり方法を選択したりする場合、その諸問題について自分が経験していないことがほとんどであるため、情報の不足によって、実行や検証ができない方法や自己の在り方を選択してしまうことがある。経験のない諸問題に対する計画や自己の在り方について、足りないことや不明瞭な部分を明らかにし、学級活動における「自律」と「共栄」に向かう学びを質的に向上するためには、常に身近な事例や過去の経験を材料にする必要がある。経験していない学級や社会の諸問題の原因が、自分たちの身近な事例や過去の経験と本質が同じであるという気付きにより、解決の方法を修正したり、実行や検証可能なものへと質的な改善を図ったりすることができるようになる。例えば、男女の相互理解を目指したとき、社会的な性差（ジェンダー）を解消するための方法を考え、学校生活において男女の違いに偏見による差別について目を向けることにより、自分たちにもできる取り組みや自身の在り方を自己決定できるのである。これが、身近な社会や生活の考察による「省察」のアプローチである。このような考えから、様々な諸問題の解決に向け、理想と現実の違いを明確にする過程において、身近な事例や経験を材料することによって、「自律」と「共栄」に向かう学びの質的な向上を目指していきたい。

Ⅲ 実践例

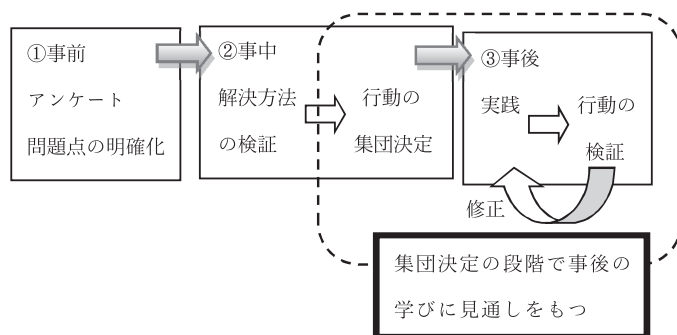
(1) 事後の学びに見通しをもち、修正を保証した取り組み（第1学年）

学級活動の内容	(1) 学級や学校の生活づくり ア 学級や学校における生活上の諸問題の解決 「学級をよりよくするために」		
本実践の目標 実践の概要	事前のアンケートから学級生活における問題を明確化し、解決するための具体的な行動の在り方を検討する。また後日、学級会を実施し、実践したことについて成果と課題を明確にし、さらなる改善へと繋げていく。これらの活動を通し、自発的、自律的な環境が整備されるとともに、これからの学校生活に見通しをもち、互いの成長を支え合うことができる。自分や自分の学級がよりよく成長していくために必要なことは何かを考え、実践していこうとする態度を育てる。		
	事前	事中	事後
	事前アンケートを実施し、生徒の学級に対する問題点を把握する。	学級の一員として、問題点の解決に向けた話し合いに意欲的に参加し、学級をよりよくするための行動を決定する。	各学級で決定した行動を実践する。後日学級会で、成果と課題を明確にし、行動の修正、さらなる実践へとつなげていく。

研究の視点および授業の実際

① 事前の学習活動

学級の全生徒を対象に「最近の学級の様子」というタイトルのアンケートを実施した。アンケートは良い点、問題点についてそれぞれ8つの項目から1つ選択し、カードに記号のみを記入するものとした。生徒が記入したカードはそのまま模造紙に貼りグラフ状にすることで、学級の良い点、問題点が明確になった。



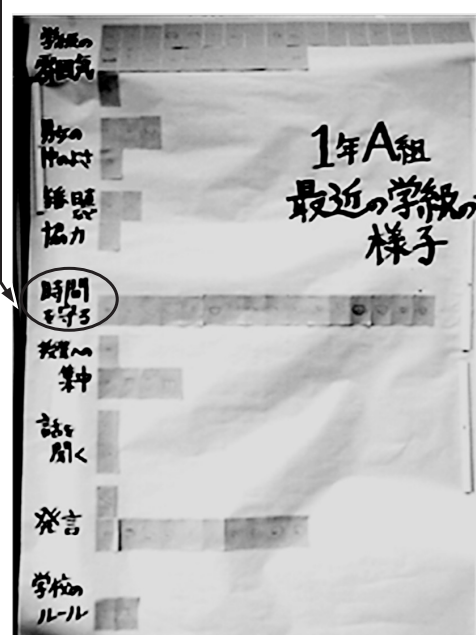
② 事中の学習活動（学級会1回目）

議題：時間に対する意識を向上させるためには、どのように行動したらよいだろうか

アンケート結果をもとに、学級の課題を解決した理想の姿を設定し、解決の方法についての意見を話し合い、話し合いを通してどのように行動するかを選択することとした。アンケートにより学級の課題が明らかになった上で、理想の姿を設定することで、これからの自分たちの姿に見通しをもって課題解決に取り組むことができると考えた。「共栄」に向かう視点として、全員が取り組むことのできる具体的な行動を課題解決の方法として集団決定することとした。解決方法が意識や態度といった内面的な部分になってしまうと、互いに成果や課題を評価することが難しいが、具体的な行動とすることで他者の行動を見て、自分の行動に活かしたり、互いに改善したりすることができると考えた。また、2回目の学級会において自分たちの行動の成果と課題を明らかにする時にも、実際に「できた」か「できない」かがすぐにわかり、検証のポイントを明確にすることができると考えた。

本実践に取り組んだ学級では、アンケートの結果から、学級全体の「時間に対する意識」を向上させ、「注意されなくても座っている状態」をつくるための具体的な解決方法を考えることになった。生活班（6人グループ）で話し合い、具体的な解決方法を検討した。班で出された解決方法は、ホワイトボードに記入し、黒板に貼ることで、全体で意見を共有しやすくした。「マナー当番を決めてチェックする」「着席しない人の名前を公表する」等の意見が出たが、「チェックされるから座るでは、本来の時間に対する意識を向上させることにはなっていない」という意見が多く出された。問題解決の方法が目先の対処法になるのではなく、自分たちが成長するためにはどのように行動したらよいのかを考え、議論することができた。最終的には、自分たちの理想である「注意されなくても座っている状態」を目指し、座らない生徒に対しあえて「声かけをしない」で、座らない生徒が周りの状況に自分で気付き、時間を自分自身で意識するという形で折り合いをつけ、集団決定に至った。「声かけをしない」を実践し、3週間後に再度、学級会を開くことを学級全体で確認した。

アンケート結果は青（上段）が良い点、ピンク（下段）が問題点



③ 事後の学習活動（学級会2回目）と実践を終えて

本実践に取り組んだ学級では、3週間後の学級会より前に、帰りの会や学級日誌の中で、解決方法が機能していないことについて、一部の生徒から反省があげられていた。全員で取り組める具体的な行動を決定したことで、日直が設定する「今日の目標」に反映させ、日々の振り返りの中に活かすことができた。2回目の学級会では、解決方法について「省察」を行い、時間への意識が少し高まったものの、依然として全員が時間を意識し行動できず、自分たちが選択した「声かけをしない」という方法が有効ではなかったという共通理解が学級全体で得られた。その上で解決方法を再考し、「座っている人が声をかける」という方法で今後は取り組んでいくという集団決定に至った。他の学級では1回目の学級会で集団決定に至らず、解決方法が複数になってしまったが、2回目の学級会で、自分たちの選択した複数の方法を同時に実践していくことが困難であることに気付き、方法を1つに絞って行動していくことになった。このように、1回目の学級会で生徒が有効な方法を選択できなくても、事後の取り組みの中で「省察」を活用することで、その後の取り組みに見通しをもち、自分たちで学級をよりよくしようという意欲が増し、個人の成長だけでなく学級全体の成長につなげることができた。今後は学級会以外の時間も利用し、定期的な検証に取り組むことで、さらに効果が高まると考えられる。

(2) 分散した解決の過程を可視化し、共通の視点を導く授業展開（第2学年）

学級活動の内容	(2) 適応と成長及び健康安全 キ 心身ともに健康で安全な生活態度や習慣の形成 「小樽防災調査のまとめ」		
本実践の目標 実践の概要	第1学年では、あいの里地域の防災についての学習を行い、その意義を学んだ。また、札幌管区気象台による講話をもとに、防災についての知識を深めることができた。第2学年では、異なる地域に目を向け、津波などを想定した海岸地域の防災について学ぶことで、北海道、日本における防災・減災について基本的な知識を身に付けることをねらう。事後学習では小樽での訪問先における防災に関する視点の違いをもとに、沿岸地域の防災についての理解を深め、まとめる活動を通して、防災・減災意識を高めていきたい。		
	事前	事中	事後
	昨年度の学習をもとに、小樽の防災についてどのような実情があり、どのような取組が行われているか予想しながら、調査活動に向けて質問事項や調査したい事柄を整理する。	小樽第一管区海上保安部（巡視船の船内探索を含む）、地質研究所海洋科学研究センター、小樽消防本部と協力して、海岸地域における防災の実情（津波などの対策）の情報収集を行う。	小樽防災調査の活動で集めた情報をもとに海岸地域における防災と、事前に学習した札幌における防災とを関連づけてまとめる。

研究の視点および授業の実際

導入で、3つの訪問先でどのような活動があったか、どのようなことを学んだかを問いかけた。「離岸流」や「津波」などの災害について説明を受けてきたとの発言に対し、訪問先の異なる班が「自分たちの訪問先でも聞いてきた」というつぶやきが出た。訪問先は異なっても、沿岸地域の防災について関連していることやつながりのもてる部分があるのではないかという思いを引き出し、「沿岸地域での防災対策として、何をすればよいだろうか」という学習課題を共有した。

課題解決に向かう見通しとして、まず訪問先から得てきた情報を自分たちの班で整理すること、そして、同じ訪問先の班と確認したり、他の訪問先の班と交流したりするとよいのではないかと意見が出された。解決に向かう過程を模造紙と情報カードを用いて以下のように可視化することを、「自律」と「共栄」に向かう学びの手立てとした。

- 活動① 自分たちの訪問先について情報カードに学んだことを書き込み、模造紙に貼りながら整理する
 活動② 交流の場面において、他の班から情報を収集し、それらを訪問先ごとにまとめ、模造紙に貼る
 活動③ 3つの訪問先の情報をつなぎ合わせ、現象のメカニズムや危険性、対応策などを結び付ける
 活動④ 課題解決として、どうすべきか意思決定し、模造紙中央に宣言として記入する

情報カードに学んだことを書き込む際、どのような情報が役に立つのか選択したり、どのような書き方をすれば他者に伝わりやすいのかを意識したりして活動をすすめていった。班での情報整理後、他の班の情報を集める際の役割分担を考え、全体で共有した。その中で、「〇〇さんは海上保安部から、△△くんは消防本部から情報を集めることを確認した」ということに付け加えて、「防災のための研究をすすめている施設と災害の救助を行っている施設では、考え方や視点が違うはずなので、その違いに注目して情報を集めようと考えた」という発言を受け、情報収集の仕方について再検討することができた。



情報カードに記入し、模造紙に貼っていく様子

そうして、解決に必要な情報は何か目的意識をもって交流に向かうことで、3つの訪問先同士の関連性を意識した活動となった。収集した情報を班内で持ち寄り、情報カードとして模造紙に付加しながら、情報同士をつなぎ合わせ、自分たちの考えを整理していった。「消防本部や海上保安部が防災・減災にどのように取り組んでいるか知り、自分たちが防災の意識をもって生活することが大切ではないか」、



訪問先別に情報カードを貼って整理し、中央に課題解決の姿を示す

か、「離岸流について、メカニズムを知ることによって自分の聞いてきた対応策の意味がよりわかった。災害のメカニズムと対応策を結び付けて理解するとよいのではないか」、「地質研究所では想定することが大切であると聞いたが、消防本部では想定を当てにすることはできないと学んだと聞いた。矛盾しているのではなく、想定できることを広げていくと同時に、想定外のことに目をつけることが大事ではないか」のように、収集した情報をつなぎ合わせ、宣言としてまとめることができた。

授業の終末には、学びの過程を「情報の集め方にもっとよい方法があったのではないか」と振り返る姿も見られた。交流の時間を2回に分け、1回目の交流後に情報整理を行い、「さらにどのような情報が必要か」と考える場を設定することで2回目の交流がより視点を明確にすることができたのではないかと考える。

□本時の学習を振り返って・・・

小樽は札幌と違い、海に面しているので、小さな地震でも津波がくるかもしれないという危険を背負っていると改めて思いました。その中で、 さんが言っていた「想定を知り、想定を信じるな」ということが大切だと思いました。何事でも、ハザードマップ=計画、想定なので、全てではないことがわかりました。

他者の発言から考えを広げている記述

このように、課題解決の過程で情報収集の仕方を全体で交流したことや、情報を可視化したことが活かされていた。異なる訪問先の情報が互いの学びを支え合い、他者との関わりから課題解決に向かうことができたことで、防災意識が高まり、実感を伴った宣言を作成することができた。しかし、個々の防災意識という点では、自己決定として見取れなかったことが課題である。

防災学習の次週に行われた地震を想定した避難訓練において、今回の学びとつなげる記述が見られた。防災学習での学びと、避難訓練での行動が結びつき、日常生活へ活かそうとする意欲が育まれていたと考える。

宿泊学習での学びもあり、学級・学年全体が「もしも」を意識して訓練に取り組んでいました。でも、今日は「今日は避難訓練」とわかっていて行ったので、と日頃から「もしも」を考えていた、学級の課題(5月の目標)であるかばんのチェック時間の見直しも徹底できるのではないかと思います。また、私自身「防災について今まで学んだこと」を思い出し、「当たり前」をもう一度見直すいい機会になったので、「想定として、想定を信じない」を心がけています。

防災学習の次週に行われた、避難訓練の振り返り

IV 実践から見えてきたこと

学級活動における「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びにおいては、特別活動のねらいと本校研究の視点が重なることから、特別活動（学級活動）の学びを通して、求める生徒の姿である、自他の理想の姿を描き、その実現に向けて自ら他者や対象に働きかけ、互いのよさを活かしながら、新たな知を創り築き上げ、自己を更新していくことができる生徒の具現化に寄与していると考えられる。また、実践を通しての成果としては、何度も課題を解決するための計画を考えたり、修正できる時間や場面を確保したりしたことは、関わり合う者同士にとっても有益な手段を考えることになり、「省察」を活用した「自律」と「共栄」に向かう学びの手立ての基本となる視点を明確にすることができた。

しかし、課題も次の二点が明確となった。一つ目は、学級や学校の生活づくりの内容、いわゆる学級会の在り方である。集団決定を行うには、様々な生徒の意見から合意形成を図り決定する必要がある。今回の実践では、学級会を教師の主導により進行したが、それでも合意形成につなげることに時間を要した。特に「自律」に向かう視点に焦点を当てたとき、解決の方法を検討することだけではなく、どのように合意形成を図るべきか、集団決定していく過程で、いくつかの選択肢について生徒が学んでいくことが大切であると考えている。

課題の二つ目は、話し合い活動の在り方である。本校の「共栄」に向かう視点は、単に互いに気を使いながら活動できればよいというものではない。互いのよさを活かしながら、切磋琢磨することが必要であり、時には仲間の考えに必要な視点や足りない部分を指摘することも必要である。互いの意見を尊重するあまり、足りない部分に気が付いていても、話し合いの雰囲気を大切にしようとする傾向がある。仲間だからこそ言える関係性を築き、本当の意味で切磋琢磨できる「共栄」の姿を具現化できる手立てとともに、学校としての在り方を考えていきたい。

V 参考文献

- ・折出健二『特別活動』学文社、2008年
- ・杉田洋『よりよい人間関係を築く特別活動』図書文化、2009年
- ・杉田洋『自分を鍛え、集団を創る！特別活動の教育技術』小学館、2013年
- ・佐藤真『各教科等での「見直し・振り返り」学習活動の充実』教育開発研究所、2010年
- ・日本特別活動学会監修『キーワードで拓く新しい特別活動』東洋館出版社、2010年